

『庭莊子珍物茶話』 下巻 翻刻と注釈

岡島由佳・エイデン・ランフォード・大屋多詠子

【はじめに】

本稿は、曲亭馬琴の黄表紙『庭莊子珍物茶話』（寛政九年・鶴屋喜右衛門刊・北尾重政画）の翻刻と注釈である。前号掲載の上巻に引き続き、今号では下巻を取り上げる。翻刻・注釈の方針は、前号の凡例通りであるが、書き入れの台詞のうち、発話者が明らかかなものについては（ ）で補って示した。なお、紙幅の都合上、英訳は次号への掲載を期す。

7、（六才）

鹿惣兵衛は、由なき欲心より厄介者を引ずり込み、その中にも道行のできぬ者はいざり也。鹿惣兵衛一生の知恵を出して近所の湯屋を頼み色く上手を遣ひ、給金いらすにいざりを

7、（六才）



湯番にやりしが、なるほど湯屋の番頭は朝から晩迄高ひ所へ上がつてゐて腰抜でも勤まりさうなものと給金いらずを取柄にして湯番の口が相談ができ、たつた二日見見へに行たその日に風呂の中で大喧嘩、上を下へかえせ共、肝心の番頭はいざりゆへ身動かしもせず、眼ばかりまぢくしてゐる所を台の上から引ずりおろされ散々ぶちのめされた上で目見へたつた一日でしくじる。

覚悟うしろ。

へ八や、静かにしやな。それで喰らはしてたまるものか。

【注釈】

*1 由なき よくない。よこしまな。「よしなき戯言われながら、慢なりし」(『南総里見八犬伝』九回)

*2 いざり 足が不自由な人のこと。「われ等の家へ常に参る乞食の候。みざりにてあればふびんに存じ」(『醒睡笑』四)

*3 上手を遣ひ お世辞が上手いこと。「とにかく爰は上手をつかふていとまをとるが上分別」(『世間娘谷気』四)

*4 湯番 銭湯で湯加減や接客などをするのだが、ここでは特に番台に座る番頭を指している。「湯番のあたる火と共に焚落の灰となり」(『浮世風呂』二自序)

*5 目見へ 雇用が決まる前に見習いとして数日勤めること。

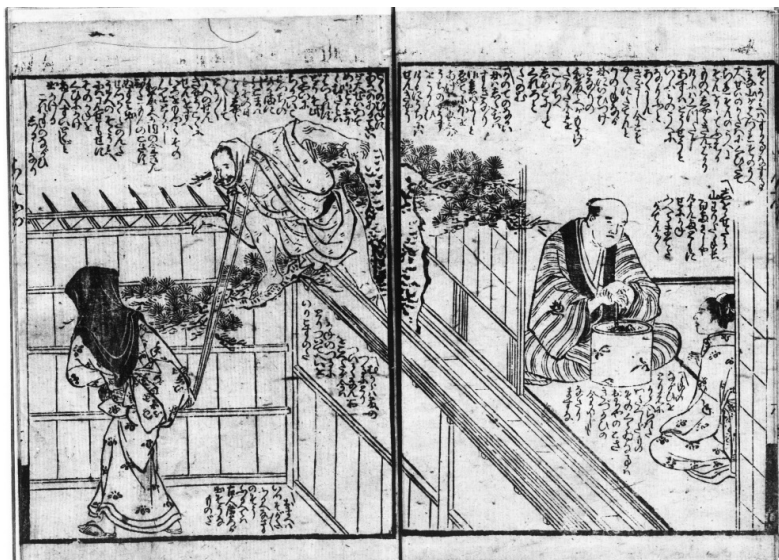
「一昨日もどこか下谷のおやしきへ目見にいくとって」(『東海道中膝栗毛』発端)

*6 まぢく 見ているだけで何もできずにぐずぐずしている様子。

「只一口に大鳥も、云こめられてしよげ鳥のまぢまぢとして閉口す」

(『夏祭浪花鑑』二)

【挿絵】腕に彫り物をした男達が洗い場で喧嘩をしているのをいざり(袖に「ゐ」)が止められず困惑している。(大屋)



龜惣兵衛はする事なす事みな山が外れ、その上大勢の片輪に喰ひたてられ、損の上に損をして増えるものは借金ばかり。今日は喰つたが明日はどうせうといふ身の上になり、ふと悪心萌し、今こそ役に立てんとかの手長女に言ひつけ、隣の和藤兵衛が儲けためた金をこつちへ²しめこにしてくれろと頼む。

へかの手の長い女は³下地は好きなり御意は良しと、⁴得手に帆を上げ、和藤兵衛が家の様子を窺ひけるに、家には穿胸国の胸に穴のある⁵手合が大勢ゐて、⁶目角が多く⁷むざとは入られず、どうぞ此手合に近付いてこつちの仲間に引込まん、その日から⁸じやらくしてとう⁹一人の穿胸国にも膳を据へ、色を以てその心を蕩かし、和藤兵衛が内の金、金¹⁰鏝一文残さず、盗み出し、折角頼んだ主人の龜惣兵衛には見せもせず、その金を首にかけ、兩人¹¹随徳寺と出かける。これ¹²手の長ひ印なり。(龜惣兵衛)へし終、せたら、¹³山割だ。¹⁴手長百両、わしや九十九両。ともに銭金増へるまでだ。合点か。

(手長女)へ手の長ひを取柄に抱へられた私だもの。その位な事は¹⁵お茶の子さ。氣遣ひの金の字もなさりますな。

(穿胸国)へ昔は藤の蔓に取り付いて難所を越へたが、今は金の蔓に取り付いて塀を乗り越すのだ。

(手長女)へお前は¹⁷いつそがたく¹⁸震へなさるの。そう震へては¹⁹古人広右衛門が出そうなものだ。

【注釈】

- *1 山が外れる あてが外れる。「山がふたつまではづれ」（『擲銭青楼占』）
- *2 しめこ 「うまくいった」の意の「しめた」や、「絞める」などに掛けて手を入れることを言い、「しめこの兎」などと用いる。「さてこそ北八がやくそくのしろもの、しめこのうさぎと、いきなりを手をやつてさぐり見れば」（『東海道中膝栗毛』五上）
- *3 下地は好きなり御意はよし もともと好むところである上に他から勧められ辞退するはずもない、という意。「是非に／＼是非なくも下地は好也御意はよし」（『假名手本忠臣蔵』三）
- *4 得手に帆を上げ 得意とすることを發揮する好機を得ること。「けつきざかりの恋風の追手にあてにほを上て舟のそこのぬけなんだはまだお仕合／＼」（『用明天王職人鑑』二）
- *5 手合 そのようなやつ。やつら。「どうせ又、あてやいの氣にいらうとすれば」（『浮世風呂』三・上）
- *6 目角 物を見分けたり、見抜く眼力。「物を見た時直ちにそれを頭にとどめる人」（『日葡辞書』）「内々目角を付て居るのだが」（『いろは文庫』一三・七四）
- *7 むざと うっかりと。「賢しき女にて義琴に心中立。むざと大事も明されず」（『神靈矢口渡』一）
- *8 じゃら／＼ でれでれと戯れかかる様子をいう。「何じやいのじゃらじゃらと、国へ往んでお辰様にそふ言ふて悦ばさんせ」（『夏祭浪花鑑』八）
- *9 膳を据へ 女の方から男へいい寄ること。据膳をする。「下地はすきにすへる膳、うまひ首尾とぞ成にける」（『長町女腹切』上）
- *10 鏝一文 鏝は悪銭のこと。きわめてわずかのかね。「懷中にはびた一銭おりない」（『見徳一炊夢』）
- *11 随徳寺 ずいと逃げることを寺のように言う語。跡をくらますこと。「金子百両ぬすみ出し首に懸け、随徳寺と出掛ける」（『通風伊勢物語』）
- *12 手の長い 手くせが悪い。盜癖があること。「盗みさへせねば正道な生れ付き、それで娘めが乞賀、手の長いが玉に疵」（『日高川入相花王』三）
- *13 山割 山分けにすること。折半にすること。「身の代はこなたと山割なんとうまいか」（『神靈矢口渡』四）
- *14 手長百両、わしや九十九両。ともに銭金増へるまでだ
「こなた百まで私や九十九まで共に白髪が生るまで」（『譬喩尽』五）を踏まえた洒落。
- *15 お茶の子 たやすいこと。お茶の子さいさい。「ナニサ此位な事はお茶の粉だ。わっちは読本といふ読本を暗記てゐるから」（『浮世床』二上）
- *16 金の蔓 前号（二ウ三オ）の注10参照。
- *17 いっそ たいそう。ずっと。「長崎屋でぶんきょうさんが、おひろめなんしたのでおす。いっそあだで、ようすよ」（『通言総籙』二）
- *18 古人大谷広右衛門 「古人」はここでは故人か。三代目大谷広

右衛門。享保十一年（一七二六）——寛政二年（一七九〇）。享年六五歳。実悪。天明四年三月の評判記『役者嘗舞台』（大坂）には「此人は二代目広治の弟子にて広右衛門と申名は三代目にて宝暦十二年冬より此名に改寛延の末より出て実悪は甚しぶとく江戸表にては巧者分段々出世して此位（上上）迄も取上られたが余程老人と成て小廻り薄きゆへ近年頭取役を勤」めたが、この年病氣で休んだともある。天明五年四月『役者三ツ叶』（江戸）には「段々ゐくじはなくなれ老木の身のこたいぎにみへます」、天明八年正月『役者五極成就』では実悪の巻軸に位置づけられるが「巧者でもおしいるには年が老松」ともあり、病氣のせいしか、晩年は老いが見えていたことが伺える。「がた／＼震へなさる」も晩年の様子か。

【挿絵】右手、屋敷内では麿惣兵衛と女郎の手長女（手長嶋ではなく盗癖のある女郎。袖に「手」の字）が話をしている。異時同図で、その後の場面では、堀を乗り越えようとする穿胸国の首にかけた財布の長い紐を、頭巾を被った手長女が引つ張っている。

（ランフォード・大屋）

9、（七ウ八才）



9、(七ウハオ)

かの手長女は色をもつて穿胸国をそゝのかし、和藤兵衛が金を盗み出し、どこにあてはなけれども、足に任せて逃げてゆく。龜惣兵衛はかねて邪推をまはし、手長女が、その金をちうでせしめる事もあらんかと、とある原に待ち伏せしてゐる所へ、兩人はすたゝとたどりつき、稲叢の陰にしばらく休まんと、なに心なぐちよる所を、思ひがけなき稲叢の後よりびらものを突出し、穿胸国の胸のあたりを7つぶくと突通す。この体を見てかの手長女は、命あつての物種と金の事も打忘れ、後をも見ずして逃げて行く。

さて、穿胸国は後ろより突きかけし刀が丁度胸の穴へ刺し通され、痛ひ事はさてをき、手傷きつ負はねど、様子あらんと空死して、わざと10ダアゝと苦しがる。

へこの女も始終ろくな仕舞はせまひと思つたが、あんまりかけ出して古井戸へ落つこち、肩骨をくちいて一生手が利かぬやうになる。これらが手の長ひのよい手本なり。

(手長女) へ手の長ひかはりに足も早ひ、何でも逃げる事だ。こはやのゝ。

(鹿惣兵衛) へハテ、これほどゑぐるに、ねから手応へのせぬ体、こいつ豆腐の生まれかはりか知らぬ。

(穿胸国) へ痛くもなんともないが、つき合だから、ダアゝと苦しめば、虚空にゑぐるやつさ。

【注釈】

*1 足に任せて 足の向くまま歩きまわる。「かくて月日を送る身の、羊の歩み隙の駒、足に任せて行くほどに」(「百万」)

*2 邪推をまはし あらぬ疑いをかける。「目付を附け、邪推を廻して、下の者に私欲をさせまじきとする迄のことにして」(「政談」)

(二)

*3 ちう 途中。「娘を売た其金の中で半分くすねて置いて、皆やるまいと思て、コリヤ殺して取たのじやな」(「仮名手本忠臣蔵」六)

*4 せしめる うまく立ち回つて自分のものとする。「百両の富にあたりしにつけこみ、なんでもわりまへを、せしめんとて、むせうにおひやりちらかし」(「東海道中膝栗毛」八中)

*5 稲叢 刈り取つた稲を乾燥させ、脱穀するまでの間、空地などに積み上げておくもの。季は秋。「コレ吾妻様、怖いことはない。介抱ゝと稲村陰に忍ばせおき」(「双蝶蝶曲輪日記」第五)

*6 だんびらもの 刀身の幅の広いこと。また、その刀。「身の置所白浪や、此街道の夜働き、だんびら物を落し指」(「仮名手本忠臣蔵」五)

*7 つぶゝ その音から、針などを無造作に刺すさまを表わす語。「三百人のふせぜい手手にやりをとりなおし、よせ手のどうはらをつぶゝとみな殺しにする。へつぶゝゝゝ、しめたゝゝ」。

(「楠正成軍慮智輪」)

*8 命あつての物種 命があつて初めて何事もなし得る、命がなくなればおしまいだの意。命は物種。「命あつてのものたね」(「諺苑」)

*9 空死 死んだふりをする事。「然とても由断すべからず、陽滅そらしにならば逃もやせん。蚤はく手脚を括らずや」(『近世説美少年録』三三回)

*10 ダア／＼ 歌舞伎用語。歌舞伎の舞台で、殺される者が死ぬときに発する叫び声。「死んだア」の略。「切られた役人 殺された人」は、ダア、といふて、血綿を肩へかけて倒るる」(『紙屑籠』)

*11 仕舞 人の境遇の結末。身のはて。「子は三界の首枷とて、現世未來を取外す。悲しき老のしまいやと」(『八百屋お七』)

*12 手が利かぬやうになる 「手が利く」は、手先の仕事が上手である意。

*13 よい手本 とんでもない手本。「良い」は、よくないと思つてゐることを、わざと反対に言い、とんでもない、の意。

*14 こいつ豆腐の生まれかはりかしらぬ 諺「豆腐に鎚」、「豆腐に金槌」などの豆腐を相手にしても手応えがないことを踏まえた表現か。

*15 虚空に むやみに。やたらに。「此の頃は何が目に見えたか、こくうに親仁がにえかへる」(『傾城禁短気』三・四)

【挿絵】『仮名手本忠臣蔵』五段目を踏まえた図(斎藤千恵「『忠臣蔵』五段目の初期演出―松の木をめぐつて―」『演劇研究会会報』二七、二〇〇一年)。円錐形の稲叢いねむらの後ろから、縞の襦袢に、山岡頭巾を被り、口に財布をくわえた惣兵衛が穿胸国の胸の穴に刀を刺し通す。足下には、閉じた蛇の目傘が落ちてゐる。手長女(袖に「手」

の字)の横には、「東すいとくじみち」と、「猿太彦大明神」の文字が記された道標を兼ねる石碑が建つ。赤穂市立歴史博物館所蔵の忠臣蔵の五段目を描いた浮世絵(楊斎延「一八九七年」)には、見ざる、聞かざる、言わざるの絵がある。前号(二ウ三才)注28「庚申塚の猿」参照。(岡島)

10、
(八ウ九オ)

龜惣兵衛は穿胸国の死骸を稻叢の蔭へ放り込み、首にかけたる金財布を奪い取り、紐とくくと月影に改めみれば、金にはあらで土で拵へた縁起の小判なれば、扱はる二杯目を喰つたと大に驚き、遠くは行かじと手長女が跡を追ひ、一散に駆け出す所に思ひも寄らぬ鉤繩に足を絡まれ、大地へどうと倒る、所を二三人の穿胸国、稻叢の蔭より頭れ出で、龜惣兵衛へ高手小手にく、し上、いづくともなく連れて行。これより龜惣兵衛が欲心を戒めんと穿胸国に言い含め、わざと手長女に馴れ合たる体にもてなし替玉の金財布を盗み出させ、一つ杯喰わせた狂言なり。

(龜惣兵衛)へア、ゆるせく。

へかうもあらふか。あし引の山の外れは高手小手く、し上げたる松が枝の薦。おきやるがれ。

(穿胸国)へさつき付き合に死で見せたら、蟹の穴をつく氣になつて、無性にゑぐるやつさ。コレわるひ事を企むとな。¹⁰
穿胸様が見てござるはふてくしひ。

*1 死骸を稻叢の蔭に放り込み、首にかけたる金財布を奪い取り、紐とくくと以下、七ウ八オに引き続き『仮名手本忠臣蔵』五段目、斧定九郎が与市兵衛を殺害する場面を踏まえる。「件の財布くらがり耳の掴よみ。ヒヤ五十兩。エ、久しぶりの御対面忝しと首に引掛け死骸を直に谷底へ。跳ね込蹴込」(『仮名手本忠臣蔵』五)

*2 縁起の小判 商家の縁起棚に飾る小判で、百両包みの形に似せ

て、土や真鍮で造り、包み紙で包む。「縁儀棚：常の神檀の如くし
：金鉛紙製小判百両包形…」（『守貞謄稿』二十・娼家下）「皆々貰
つた金出し改めて、そりやこそ、みなにせがね。ほんにゑん
ぎの小判だく」（『御国入會我中村』二番目・中幕）。安永八年
（一七七九）刊『案内手本通人藏』（朋誠堂喜三三作）でも定九郎
が手にするのは偽のむかで小判。

*3 二杯目を喰つた 騙される意の「一杯食う」から、またも騙さ
れたことを言ったか。

*4 鉤縄 先に鉤を付けた縄。「磐石並聳て、陸へあがるべうもあ
らぬを、為朝主従は、齋来れる鉤索を、岩端へ投かけては手繰つき」
（『椿説弓張月』一六回）

*5 高手小手 肘から上が高手、肘から手首までが小手。首から肘、
手首にかけてきつく縛めること。「いてふの前を、情なくもあらな
はにて高手小手にく、しあげ」（『昔話稲妻表紙』四・一二）

*6 狂言 人を騙すために仕組んだこと。「ゑん二郎をいろじかけ
でよぶきやうげん、此ころはやる手也と、さとしていれば」（『通
言総難』一）

*7 あし引の山の外れは高手小手く、し上げたる松が枝の薦
「足引の」は山を導く枕詞。山の外れの松の枝に絡まる薦のように、
きつく縛められたという意。

*8 おきやるかれ 「おきやあがれ」か。やめてくれ。いい加減に
しろ。「おきやアがれ、やつぱり無益委記の型だ」といいっこなし。
作者もそれは承知さ」（『孔子篇于時藍染』上）

*9 蟹の穴をつく 「蟹の穴入り」は蟹が慌てて物陰に隠れる様を
言うが、ここでは「無性にゑぐる」と続くので、蟹が逃げた穴を
突いて蟹を捕まえようとする様に譬えたか。

*10 穿胸様が見てござる 「天道様が見てござる」の洒落。「そこが
親孝行の徳だ。はて天道さまが見てござるから」（『浮世床』初上）

【挿絵】稲穂が稔り、鳴子の縄が張り巡らされた田を背景に、龜惣兵
衛が、二人の穿胸国に押さえつけられている。左の穿胸国は「和穿」
の印（和藤兵衛と穿胸国）のある弓張提灯を持つ。龜惣兵衛の首に
は財布の紐が掛かっている。
(大屋)



穿胸国は龜惣兵衛を戒め、和藤兵衛が前に引据ゆれば、和藤兵衛その戒め縄を解き、いろ／＼教訓する。されば古語にも小人罪なし。玉を抱ひて罪ありと言へば、和藤兵衛不時の大金を儲けしより人にも嫉まれ、人に罪を作らせる事、誠に玉を抱ひて罪ありと悟りこれまで儲けたる金を三ツに分け、その二ツは穿胸国と手長嶋に遣りて、故郷へ帰る路銀となし残る一ツは龜惣兵衛に遣りて、これまでの損を埋めさせければ、龜惣兵衛もこれまでの悪心を悔やみ、本心に立ち返り、穿胸国手長嶋もその仁心を感じ喜ぶ事限りなし。

実や里に君子ある時は、盗賊起こらず。和藤兵衛一生懸命の難風に遭ひて思はず金を儲け、龜惣兵衛は一步の道を出ずして、人の幸いを妬む。その為す所その品似たりといへども、善惡自づから違いめあり。富貴貧賤は天なり。人が金持つたとて欲しひと思ふべからず。あの子がい、べ着たとて羨む事なかれ。ナント子供衆合点かく。こればかりは真面目で止めてくれべい。

へしばらくだんなのお世話になりましてお名残惜しふござりますなど、穿胸国信濃者、言ふやうな口上を言ふ。

(龜惣兵衛)へだん／＼謝り入りました

穿胸国へ雁や燕の入替はりにはお便りもいたしませう。さて御造作の此沢山なお金わいの。そんなら、お辞儀なしに頂きますといづくの島でも10欲気がなし

手長嶋へ私が「甲掛は五丈六尺と誂へて下さりませ。」¹²出来合いの股引を甲掛にしても間にあふ事じやねへ

【注釈】

*1 古語にも小人罪なし。玉を抱いて罪あり『春秋左氏伝』（桓公十年）の「周諺有之、匹夫無罪、懷璧其罪」による。つまらない人間であっても、初めから罪を犯すものではなく、分不相応の宝を持つと、罪を犯すようになるという意。

*2 不時 予定外、思いがけないさま。「民を憐むのこゝろ薄く、驕奢を極め給ふ程に、不時の課役いと多かり」（『南総里見八犬伝』二〇回）

*3 里に君子ある時は、盗賊起こらず 内容が類似する文句の例に「殿の御仕置よろしく、盗賊・海賊絶えて、戸ささぬ御代は今ぞ」（『新可笑記』三）・「民の戸さしも、ささぬ御代こそ、堯舜の嘉例なれ」（『草紙洗小町』）。

*4 一生懸命の難風 「一生懸命」は命がけのさま。ここでは和藤兵衛が「ウ（前号参照）」で難風に遭って島々を巡ったとしたことを指す。

*5 一步の道を出ずして 和藤兵衛が「一生懸命の難風」に遭遇して苦労した末に金を儲けたのに対し、龜惣兵衛は榮をして利を得ようとしたことをいう。

*6 信濃者 信濃の人は多く農閑期に、江戸へ出かせぎに出た。毎年、陰暦二月頃江戸へ出て雑役に雇われ、翌年二月頃に帰郷した。

「しなの者江戸と国とは雪と炭」（『誂風柳多留』五）

*7 雁や燕の入替はり 「雁」（秋季）で、秋に渡ってきて、春に帰る（「帰雁」は春季）。一方「燕」（春季）は春に渡ってきて、秋に帰る（「帰燕」は秋季）。雁と燕の渡りと旅立ちが入れ替わることを言う。「奉公人も居なじむ頃雁は常磐国へ旅立ち燕と入替るなり」（『敵討蚤取眼』）

*8 御造作 御馳走になった時の挨拶に用いる。「ちそうさま」「いかい御造作御馳走と。礼もそこそこ同行共」（『摂州合邦辻』下）

*9 お辞儀なし 遠慮をしないこと。「こいつはありがてへ、おじぎなしにやらかしやせう」ときた八手じやくにて、さっさつとのみかける」（『東海道中膝栗毛』四・上）

*10 欲気 欲心。「素より商売の道には賢く、欲気は微塵もないと世間の評判なれば」（『古朽木』一）

*11 甲掛は五丈六尺 甲掛は手足の甲にかけて、日光や埃などを防ぐ布片。ここでは手長嶋の手に使う手甲を指す。五丈六尺は一七メートル弱。「白の鼠色になった甲掛、脚半、草鞋がけにて」（『旧観帖』初）

*12 出来合いの股引 注文をして誂えたのではない既成の股引（男性用の下ばき）。股引でも手長嶋の手を覆うには長さが足りない。

【挿絵】床の間を背に主の和藤兵衛が煙管を手に乗っている。その横で手長嶋の女が煙管に火を付けている。穿胸国の男二人の手前では龜惣兵衛が頭に手を置いて詫げる。和藤兵衛と龜惣兵衛の前には包

12、(十ウ)



金がそれぞれ三つずつ置かれている。

(ランフォード・大屋)

12、(十ウ)

和藤兵衛は欲心をはなれ、これまで儲け貯めたる金を人々にわけ与へ、今は身柄一ツになり、この上は女護の嶋の風を売つて見やうと「引札」をまはしければ、一生子のなひ人々は、これは珍しい風、この風にふかれて、これまで授からぬ子ができる事ならば、五両や十両の金にはかへられぬと、我もくゝとつめかけ、和藤兵衛は門は毎日人脈をうつ。まことに嘘はない事、女護の嶋の風にふかれて帰るその日から、身持になる婆様もあ

り、べつしてお歴ぐは御世継が肝心、御大名からは駕籠でむかいにくるやら、和藤兵衛、わづか一袋の風を売り、たちまち³十千万両の分限となる。世の中に子のできるほど吉事はないとて、是より和藤兵衛があだなを、⁴風売吉次といひふらし、めでたき春をむかへける。

和藤兵衛、はじめは難風にあひて五年が間、難義をし、今一袋の風ゆへに、まんくたる分限となる。⁵毒薬変じて薬となり、⁶塗樽変じて徳利となる。⁷善悪手の裏を返すことは、只一本の焼餅より速やかなり。ほんにそれさ。めでたしといふのだけ。

【注釈】

*1 引札 商品の宣伝や開店の披露などの主旨を書いて諸方へ配る広告の札。ちらし。「引風の葉を拵へ：諸風散と名目をつけ、其頃未引札など申事のなき折から委細に風を治するの訳を認」(『耳囊』)

*2 人脈 人出。大勢。「花の徳人びやくのうつ志賀吉野」(俳諧『千代見草』)

*3 十千万 名詞の上について、そのものの数や量などが非常に多いことを表わす。多く助数詞を伴って用いる。「はたごはとち万両でもいから、もうちつときれいなぎしきにしてくんなせへな」(『続膝栗毛』一一・下)

*4 風売吉次 源平時代、東北地方の黄金と京の物品とを交易して

長者になったといわれる伝説的な人物「金売吉次」を踏まえた名前。

*5 毒薬変じて薬となる 初めは害をなしたものが、一転して非常

な力になることのたとえ。また、物は使い方で毒にも薬にもなる
という場合にも使われる。「くちて美酒とぞなりける。毒薬変じて、

薬となる」とはこの時よりのことばなり」(『曾我物語』二・酒の事)

*6 塗樽変じて徳利となる 塗樽が徳利と呼ばれることを意味する

か。塗樽は朱または黒の漆で塗った酒樽。祝い事に用いる。柳樽。「甄
とくり(略)江戸にて云ぬりだるを遠江にてやなと云。又此国に
て酒を嗜む人の女子を生む時は其名をやなとつくる人多し 柳樽
の略語なるへし」(『物類称呼』四・器用)

*7 善悪手の裏を返すことは只一本の焼餅より速やかなり 善と

悪の考えをがらりと変えることは、只一本の焼餅を裏に返すより
早い。

【挿絵】「女護の嶋子持風、朝四つ時まで出し申候。二三合候ま、番
附之札順に御通り可被成候」「風売吉次」「はき物ご用心」と張り紙
がある。中央に獅囀火鉢があり、その横に煙草盆が置かれている。
盆の上には火入れが見える。衝立の篆書体で書かれた「君子徳」の
文字は、『公論語』顔淵の「君子之徳風也」を踏まえているか。(岡島)

(おかじま・ゆか／本学非常勤講師)

(えいでん・らんぷおーど／本学大学院博士前期課程)

(おおや・たえこ／本学教授)